ノ 13
3150
49

特
へ13
3150
6

蘭若堂記

昔話稲妻表紙巻之五 下冊

江戸 山東京傳編

十九 刀剣の稲妻

その時麻苧いたぐちの小幡の里みかりて。山三郎がその日の子細をはぶきみかり。葛城が誠心を告あるふいとをしく存ぜられて一度はかの地みちん越あるべて。御對面あるべしとさとりけるに。山三郎のひけるは。五條坂の葛城とのふ名妓ありとかねてその内はるがその者高間条右衛門の娘岩橋とてあるんとの。夢みるもはざりしが。その者は親くの得心也。某とのひなぎけの女なりとのべども。今花街のおちぶれの身なれば。對面せんは武士の名をけがすに似たり。かれが志は不便なれども。對面はかるべからざるとのべ。麻苧のひけるは。そもいかゞ

そハたぐ。葛城ぞの〜物がたりをきけば。頃日雲ふ猫妻の衣裳を着る侍五人。ゆくゑ知の地ふ往来さるは。そのうち一人いかなるぞ伊左衛門ゆて外い漾屑の三平等四人の者ふうさぐひを。これいかゆそれ推量のごとく。相公をたち出ーそゆるもおふせん謀計ふきふまれる。先だちて御父君梦中ふ告玉ひしハ。武夏ふそいハん。殊更葛城ぞの〜誠心うさがふ所ありけるとハ。一度ゆの地ふおんにおりて葛城ぞのをたのもゆひ。ゆくゆ計のうをゆ。内外より相畳をさぐゆ。五人一等ふゆ取玉ハん良計ゆて。あふまゆけるとハ。君父の讐ふい共ふ天を戴ずとヤせべ。眼前の敵をみて時を失ひ玉ハんこと。ゆめくあるぞ。復讐の為花街ふいるゆふ。ゆゑ。ゆゑでう恥玉ハんやとゆさゆければ。山三郎げふもさうとゆひ。その夜庵ゆを具ーきゆのびやうふーて五條坂ふいたり。神林がりと成たゆめて葛城ふ對面ーけるとハ。葛城ゆ表ゆのふつゆもあるぞと山三郎ハ露ゆ疑ふもあるめゆたる詞ハなく。終夜只復讐の計を談ずて朝まぞゆみつるとゆぬこれより后葛城がりとり。金銀衣服をおくりて山三郎をうゆ。心の誠ををゆびけるとハ。山三郎ハたぐひまれなる女ゆると感歎ふたへざり。ゆて葛城ハ伴左衛門が面ゆ見知ぞ。ゆゑをゆて地ふはたらゆて。五人の者ゆ共ふ取べき便宜をぞ待る。庵ハ深き笠ふ顔ゆし袈裟衣を着ーゆ物ゆの乞公坊ふ扮てゆのびゆたるとぞ。ゆうとゆぐも五人の者ゆるく往来ーて。五人一同ふ来ることなくゆうその跡をたけゆくとゆぐも。ゆつも飯路をちくて。ゆゆハ住所もさぐうなくぞ。只心せるるぞうなりゆ。ゆゆさてゆゆゆふまゆ不破伴左衛門重勝ハ。浪人の身とゆぐる。密ふ交道たくゆり扶助ゆゆハ

一点の不足なく。笹野鰻兵衛。藻屑の三平。土子泥助。大上雁八等四人の者をかくまひおきて。父が大望をとぐる時節を待。紀伊の国藤白山の奥ふ大なる居宅を造て。野伏浪人どもをあまた召抱て。とくとくそなべ。父と共ふ濱名入道ふ味方とたのみ結構専なり。おろかといへども名古屋山三郎ふあるうちハ寝覚安からぬ。元来かれふ草履ふの遺恨あるべきぞ。かれが親をも誤りて打たれ。ふかき色にて。かとふ仇ふりふ過けるが。やとふひけども。そのやうへ弗ふ志きれいせんとべなくふ過けるが。頃日京都ふ居住をるよし偶聞出して。かの四人の者を志ざして俄ふ上京し。伏見の里ふ寓居して。人の之知りたる一様の装束して。五條坂ふ往来し。山三郎を伺て出して。ふかとやとをるとけるが。前の日大上雁八ふの地ふて。三本傘の紋ふけたる侍ふ出あひ誼詐ふ

変よをしてをろかはをるふまきしくかとが僕庵兵衛とをるのが。山三郎当国のうちふ居住し。果して我等が計ふおちて我くをはけ出くふふくびを。彼等元来好色の輩なるべ。伴左陽門ハ茨木がもとの遠山といふ阿曾地ふなるとて。その餘の者等もそれくふ志ることを得て。のち夫山三郎をおん計ハにさふなり。一向遊奥ふのみひをとつ中ね誠是愚なるうまひちり。扨山三郎ハ専ふかりらを打べ便宜をまちけふふ。一日庵兵衛ふの地ふ。あハたじくふ飯来りて。葛城が書をさし出しけ。山三郎いそぶくこれを読ふ。今夜伴左陽門等五人の者一等ふ茨木がもとふ来るよし。明出しぬ朝い未明ふかるよし。明ぬれば。堤ふかるよし。成待うけて討取玉へかなくどいと時を過しを玉ふどとくどとみドうふ

きるし。山三郎こゝ夜読おはりて。天地を拜し。おごそかにして。ひ
ざが。康義もいさゝたち。何とぞ主君の敵なれば。助太刀をちかひて
しゐぶるれがーとゆゞめ。ゆるもなる望なれども。敵大勢なる不臆
して助太刀をのちひきなど。立の人口ふかゝらんも口せーけしば汝をと
もなうことかなるべゝぞとのゝべ。康義涙をながし。おるゝゝ
ゆの所まで御供をゆるしあれとしきり息つきの水をそゝ子ゝ
ひとゆゞ立勝手次第なるべーといつゝぞ。康義おゝび。食事を調
てこゝめなどし。何ゝとと支度ーて時刻のいるをまゝ。山三郎はいざ
と曲中ふ通ふたれ男の体ふ扮。父のゆるみの左文字の刀をふ
びゝの夜の二更の頃より五條坂の長堤ふいゝて。朧月夜を幸ふ康
義ゝる麥畠のうちふ身をゆしして。時のいゝゝを待ちけり。此時ハ

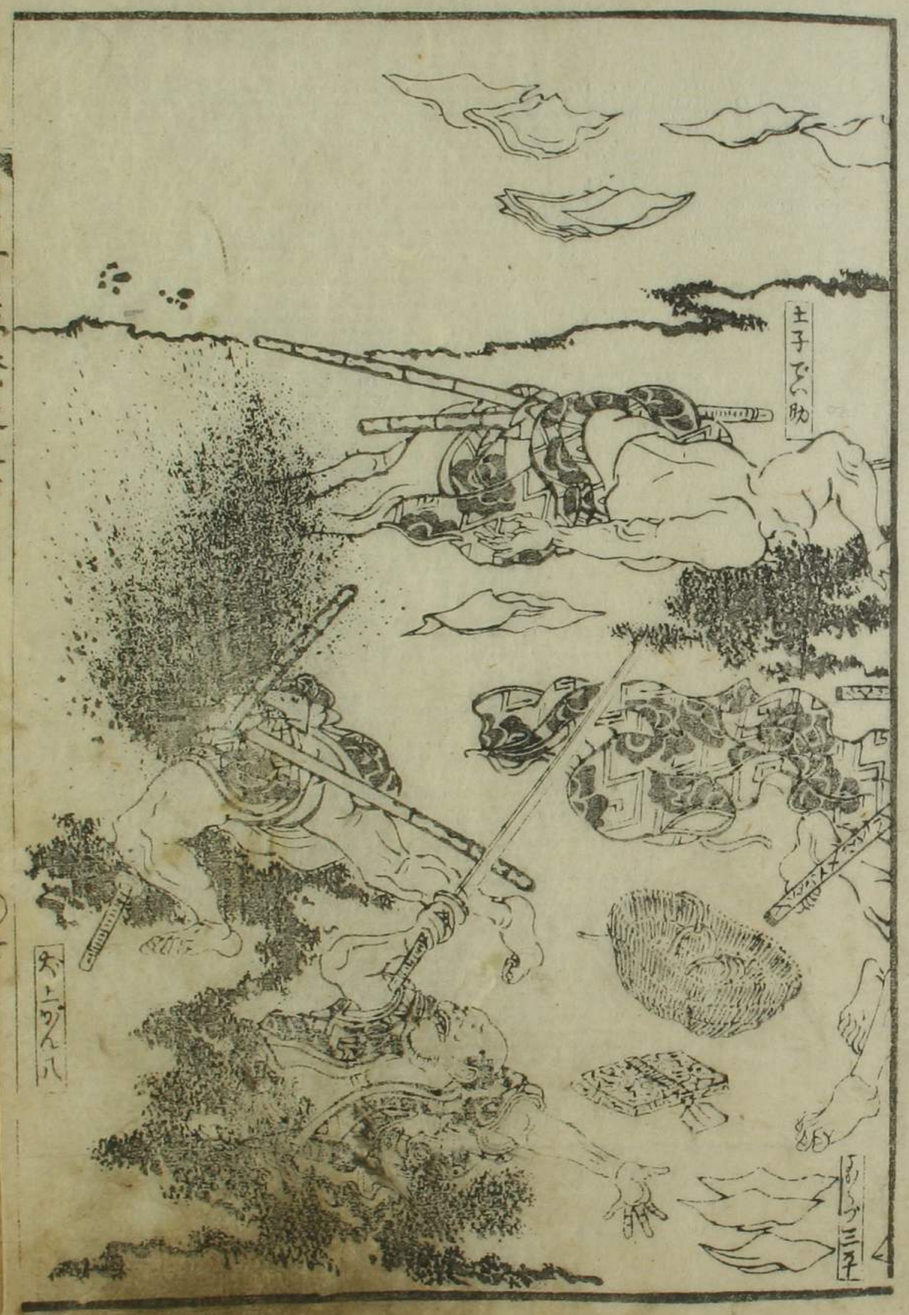
是ゆゞれの時ぞや。寛正五年三月下旬とや。折しも春雨の晴間ゆて
道ゆーけとゞる。常ゝ往来ゝゞ堤ゝるとゞ人たゝゞ
おゝて。ひゝひの提灯星のごゝふにゝけり。駕籠にらゝる叫声ハ
飯雁の音かとあやまゝる。さて夜のふゝふゝゞひて人のやきゝも
漸ゝふたゝ辻行灯のゝゝゆもやゝとゝゆて。鮒やせゝ按摩ゝゝせゆハ
ゞゞやとよゞゝ声も已ふたゝ小田の蛙の声のゝたゝゝゝて。まゞ
の鐘五更の時を告ゝて。月ハ山の端ふおちかゝりけゝば。ゝゝハ時
刻いゝゝて。山三郎目釘をゝゝめ鍔元をゝろゝげ。ゝゝて手
して待けゝふゝゞたゝくゆの雲ふ稲妻の衣裳を着たる侍一人。
編笠の下ふ覆面ーて。板金剛を踏なゝして。あゝゝ来ゝ。まちまう
けたる山三郎。堤のうへふ飛のゝゝて。ゝゞしや不破伴左馬ゝゝゝハ

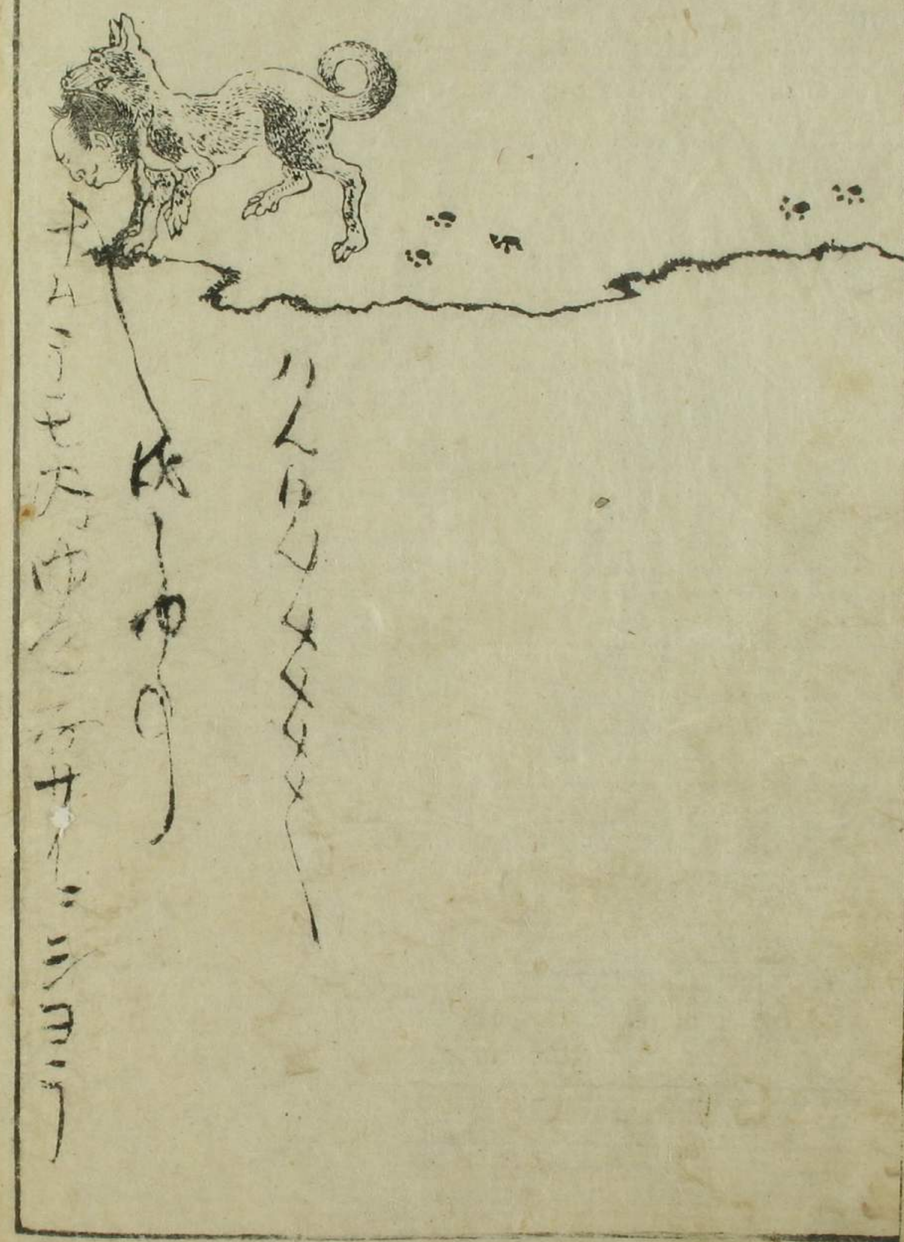
名古屋山三郎
五條坂の堤突
畠のうちふかぶかして
伴左衛門等五人の
待受の
仇をむくいん

名古屋山三郎なり。父の仇覚悟せしとよびかけつゝ氷なる刀を抜
てなをせば。四の侍高ぐとあざゝ笑て編笠をぬぎすて。氏方ようたつねもと
ひる山三郎。こゝであひしゝ天のあへ。ものゝ打かゝるぞ観念せしとのゝして
抜合せ二太刀三太刀戦ひる。山三郎うるぎ刀をうけ損じ。左を加表
浅ゝ斬さげられて地上ゝ撲地たるを。山三郎庵羅を出りて。
彼奴ゞ面をよくゝとみるぞ。庵羅立より髪をはらゝとひねおとし。
月かげゝ照しゝ。氏者ハ土子泥助まそゆをいゝ山三郎うるみづく間もか
く。又おなじごとく打扮なる侍一人のさぐりもてあゝ来る。山三郎
ひるゝ立ぶる。汝ハ不破伴左衛門なるべし。こゝ山三郎父の仇を報ゝ
とのゝ切かゝりたるとゝ。氏侍も笠をとりて刀を抜。うるみじつ七八
合戦けるが。泥ゝ足をすべりてよろめく所を山三郎飛かゝりて胴ぎりゝ陸

離ぎゝんど斬さるゝ。肥を以て下知ゝとゝび。おろ羅のそゞしく走りよる。月
の光ゝ面ゝ照ゝて。氏者ハ大上雁ハゝそゆといゝ。やどるくゝ打扮の
侍一人ゝ来る。山三郎ちゝぐと立ひ。いゝ伴左衛門こゝ山三郎
なるぞ。父を打ゝ恨の刃。ゝひおとゝいひつゝ斬ぬゝとゝび。編笠氏
ゝるぐゝとて刀を抜てきりむすびずゝおとゝたゝひけるが。運の尽
ゝや堤の端ゝ足をゝゝなじ。うつ伏ゝたるゝ所を山三郎一声さゝび
て斬けるゞ。たちまち首堤の下ゝまろびおちぬ。庵羅ぬぐとゝび
ゝぐゝ。かの首をとりあげゝそ氏首片耳をなけとゝび藻屑の三平ゝ
疑なくゝとゝゝ。山三郎その者もまゝ伴左衛門ゝそゝなるゝしかとゝゝ
なげゝゝひつゝ刀の血をゝゝ氏ぬぐひ。一息つくゝいとゝもなく。又来りる
侍もおるゝ如くの打扮なゝ。別材恰好氏度ハ匹ゝ伴左衛門とゝひつ。

五條坂の堤みゆきて名護屋山三郎復讐五人斬の圖





前のごとく名告かけとびかの侍そろえたりとのひかぐ。刀の鞘ゝ手をかける所を。山三郎をどりかけて腰車ゝ斬けるが。直ゝたちぬけ。せぶそ。三十歩あまり。廉義いかの者逃去ところえて。あゝをおりて見れば。その者前ゝ倒れ者の死骸ゝはなづき。二つゝわりてぞたをれけり。山三郎が刀ハ父のかゝの左文字の名作。斬人ハ剣法手練の早業。かくあるべきことなりと廉義心ゝ感じけるが。山三郎心ゝ思ひ。仔左衛門ゝいふ。くとうべ廉義屍とあゝたのもうして。此者ハ笹野蟹義ゝ山とのべ。山三郎のひけるハ。その者ハまさしく仔左衛門とゝろひしゝ。それも又かたきゝあらしゝ四人の者ゝ。仔左衛門をたゝきけて。父をおかたる仇人なりとのべる。本人をおざるうちハ安堵なりぐ。つゝくして来ぐれもぐあるゝとのべるとて。やゝまぐゝく待とのべる人影もなく

さとび。胸いとさわぐ。此所一方口なるとび。外ハかつる所も有てハ。こゝろゝえぬ支なるぞや。我い出口まで出てゝべければ。汝い
こゝろあつて心をはけよとのひ捨て出口の方へ出てゆく。時ハ
むろふの方より。一乗の駕籠をかゝげて馳来てけるゞ。駕籠かき
ども山三郎が刀の光のきらめくをみて仰天し。駕籠を地上ハ
打捨て。飛がごとくハ逃去ぬ山三郎駕籠のうちゝ見ひ
ろ。刀のきらさをあて垂をあげてうちをみとび。雲ハ稲妻の
衣裳着たる侍。編笠をきゝる侍。あて駕籠のうちハあり。
心ハ勇ひ。ハ伴左内門我い是山三郎なり。汝を斬て亡父の宿
恨をはらさんと。これまで心を尽せ。ひあつて今日唯今出会
さる支。盲亀の浮木ハあひ。優曇花の花咲時を得たるハ

異なるぞと。とゝ出て勝負を決せんとよび。伴左内門一言を
こたへず。何うたへけん刀も抜ず。駕籠のうちよりとゝ出
て。山三郎が胸ぐらをとりたるあぞ。山三郎刀をあげて腕をきり
さるゝ。手首ハ胸ハ残る。呼と一声さけびてたゝる所を。首ちうハ
ハ落し。いそがしく首をとりてあぐる斬も。曲中の方ハ人声おひたゞ
きこえければ。若者を奪ひてハ逃ぬと。手たゝ〳〵編笠ハ包て
たゞさる間もあらばと。曲中の者ども提灯をとり。手ゝ棒を
あつらへて。大勢四方をとりかこゝ。狼籍者を打たゝ。縄を
かけんとひしめきぬ。山三郎声高く。こゝ狼籍者ハ大和
の国佐ゝ木判官の家臣。各古屋山三郎元春とハ者。父の仇を
なるぞ。かなぞあやまるとゝ。曲中者ども。

麻ごろ
しかばい

山三部
其二

武場をのがれん為のいろいろちゑくんこいひて門のがど。已ふ大勢拵
を打ふりて。敵たりんとしたる所ふ。麻薙大勢を出しけて山三郎が
前ふちらづき。相公ハ大事のあん名なれば。かれ等ふ勝ひ取ばと。
おんかうとゆへ。おとゝハ某ゲよりふとうとうとひじとて大勢ふむうひ海
等うこ出くるふもとうりなれば某人質とありてとうふそまるど。
武あん方をば左をひくきてうこ出やさびといふおぞ。曲中の者どもやうく
得心してかうこをひくれければ山三郎夜のあけそそ間ふとのそでて
小幡ふかうとけて。初も山三郎ハ年来の宿志をこげ。ひさしきとうこ小
幡の里ふかうとけるが。武時已ふ夜ハあけそそ。伴左衛門が首を父
の位牌ふ手向ゐやとゐひ。汝ゆゑふいく年月又ゐれ苦労せこと
といひつ。編笠のうちよりて首を取出してゐれば。ゐいふ伴左衛門

あハあくぜして。葛城が首あるとゐ。ゐハ夢の現うとのひて。只あれとゐ
ゐうとちうう。さるもの大勢ふ。ゐうとかるれて心せいして父急の時ゐれば。
心ばうざとが。ゐうとふ殘ゐし手首をゐるとゐ。何ふうあくんあばうとゐ
のあうと。手くびをうばゐとゐ。ゐれば。一通の書をあばうてゐ居
ゐうとけるゐ。ゐそぶくひくさゐとゐ。是乃かれゐの文なうゐ。その文ふ
ゐうく。妾と武度不思議ふ殿ふめぐりあひ。ゐん父の仇ゐる伴左衛門
等を手引してうくせやさんとうけがひけるふ前の日伴左衛門妾が
うとふ来りてやさうくハ今までハゐうくざうし。頃日偶ゐうけば汝ハ和州
子守町の浪人高間条右衛門が娘幼名を岩橋とゐひつる者のよ。
ゐうとさあうや。ゐうくそれふたがゐ。平く我別腹の妹ゐて妾腹
なうり。その妾ゐゐありて懐胎のうちふ条右衛門がのうふ嫁

ひれ。かの方あて汝を産つる也。かぬて父道大の物語あてこそ其のちはたえておとづれも同ざりしが。はくるゝ不孝を賣しゝ夢ゆだも考ざりしは仏おそ父の恥我恥なれば父ゆ此度を告て金子を調ど。ゆみゆあがなひ出しはゝ共べしそめくゝ巳ゆ昨夜そくなくの金子を以て我ゆをあがあひあらぬ伴左衛門のヤさて所のちく我ゆゆかえあるべ別腹の兄なることとうぐひ出さて伴左衛門容ゆヤさゝいこの名古屋山三郎とゆふ者とりく汝がのとゆ通ひ来る巳かれゆ我深き遺恨あれば汝手引してあせられゝとのなりとれを同て胸ゆさぐり兄のたのゝとうぐべ夫を殺さ大罪ぞう。ゆんゆゆつきて兄をおとるも又大罪ぞう。さき同士ゆ縁つながゝしいゝぞる宿世の因果ぞと。我ゆ一ゆのかゝさゆ

御推量ぐされし。そる生ぐゝかのうへと覚悟をきわめゆゆのもとゆ今宵伴左衛門等を打ゆべと通じおき。伴左衛門どの四人の者と共ゆかゝんとヤとと用あてとて別坐敷ゆとぐゆ。家内の者ゆ伴左衛門どの深く酔たるよしを告て妾ど国房まで駕籠をかれ入させ妾伴左衛門どの姿ゆ扮て駕籠ゆ乗出ゝ。ゆんゆの手ゆかゝて死ん為ぞし。のぞゝのごくゆんゆ手ゆるんぐるゆゝば。伴左衛門を打ゝとおがされて。かゝての恨をもし玉ひ何とぞ兄の命をゆんたもけぐされし。これのゝ今生の願なり。敵の妹と同玉ひぐさぞ後悔ゝ玉ん。ゆて来世の夫婦とおがされて。とりく一遍の御回向れぐひもぐるぞし。伴左衛門どの巳ゆ妾ど身の代をはくのひたれば妾死とるもあじ道順の損とゆすぐ。ゆん身手ゆかけ

あくまで原のひなづけの妻なれば。科とあるべき変も色。ぜさのとし度ことおかれども。仕損ぜまじと胸そろさて筆もたゝぶ涙ゝ墨も散さべ。くさぐゝ殘しれとこゝゆゝ記〳〵つけて。おくのくふ

壁ゝ生るいろまで草のいろまでも恨をこひきりて〳〵

こゝゝ辞世の歌をかきつけぬ山三郎読おりて十分ゝおどろ

きび思案ゝ〳〵ゝけるが。良ありて葛城ゞ首をとりあげこつ〳〵

こゝべ。鉄将をおとして白歯とかり。みどりの髪をさらたちて笑る

がごとき顔なり。山三郎落涙して〳〵く。昔袈裟御前髪を

きり夫の身ゝかりて遠藤武者盛遠ゝ殺さるとしゝ母と夫の命

とをくゝ為なり。武葛城ハ兄の命をたすけん為ゝ身代とかりて

我手ゝかりなる心庭袈裟御前ゝもとをくゝ〳〵おとろ〳〵ゝ志

ハ不便なりとのへども。晋の豫讓ゞ衣を刺たるたゝとハ変ゝ

がねゝひのごとく。伴左衛門をたゝとけおくとハ。我孝の道たちゝし。

さゝとかゝ〳〵伴左衛門昨夜の変をこゝ。遠国ゝ逃走ハ必定之畢竟

我心せきこゝる怪ゝ。名告かけて返答をまゝど。おあやまりしハ一生の疎

忽なるこ父の仇をむくへべき者の所為ゝあゝど。丑の人ゝ〳〵れん

ことの〳〵ちをゝ〳〵。父の霊魂夢中ゝ告ゝひ〳〵昔ゝひなづけの女ハ

かゝゝの妹とのふことを告ゝべき理なるゝ。左もなくしハ〳〵くまゝ

こゝがごとき悪縁なん。先年生駒山の麓ゝて奥方をとゝ〳〵し〳〵時死ねばかく

ぬ一命を。これまでのさなゝ〳〵も。御手人ゝのおんめくをたゝぬ。父の

仇をむくゝん為なるこなるゝ。今ゝおのおく方の御存亡もさゝなる

ど。父の仇も打得ざる変不忠ゝやのそん不孝ゝやのそん。我身なゝ

心對鏡天昭白昼
節磨玉雪苦青春

葛城辞世
壁ゐ生るいろまで草の
いろまでも
つきぬ恨をゐひ斬ちよ

愛想尽ぬ。さても武運ゐ尽くるゑ。腹かきさばきて冥途ゐ
いそぐ。とりて親人ゐ分説せん之心を決り。血刀をとりてなどく
腹ふつきたてんとする折しも。外のうちゆれたやまるゑ。あばしく
と声うけて入来る人をゐるゑ。是別人ゐあらず。則是梅津嘉門景
春なるゑあらふ。さる比ハ麻呂が第猿二郎ゐぞあるる。山三郎
あるゑふゐひ切けざ比びいぶるゑ。ひとまづ刀を鞘ゐおさめていで
むえが。嘉門上座ゐ打通りていく。猿二郎ゲ案内ゐて氏かんし家へ
まゐて越しゐ別支ゐあらず。某ゐあらず。河内の国金剛山ゐ立ゑ避
仕官の望をなりといえども。官領勝基公の懇望ゐ辞ぜがたく。去冬君
臣の契約を改上京して今已ゐ勝基公の館ゐあるゑ。軍師をもつて
礼義あつけ比びいふゑ。ゐゑ人の貪さふ引ゐて。何不足あゐ。ゐとあるゑ。

夫に付けてかゝる事には先年某が母病になやみし時御親父三郎
左衛門どの某代の金子をめぐみて母の命を救ひ下されし洪恩心に
銘じ。せめて露ばかりもその報せんものと思ひしかひもなく三郎左衛
門どの闇打にあひ玉ひ。和殿も遠くへ去れりと聞てせめてもお過
しが。これなる猿二郎がかたるによりて此所にかくれ住るよしうけ
玉はり。對面して某がいふ旨を告ばやと忍び出立にてまうで来る
が。途中にて人のかたるをきけば和殿五條坂の堤にて古傍輩四人の者
を手ぱへたゞへにて葛城とやらんいふ阿曽比を手にかけられたるよし。
今腹きらんとせられし察する所人たがひの誤をはぢての事
おもふに若さもあらば大なる心得たがひといふべきなり。その由来いふとあれど
べ。おそれ君父の仇をむくいんずるものはいく度も恥を忍び命あらん

かぎりはたとへ千万里も走りても。たづね出して仇をむくゆるが孝道の
ならひなり。今自殺せんなどとは疎忽のいたりにあらずやといへば。山三郎其
理にふくし面目なき体なりしが。嘉門かさねていひけるは桂之助どのへ
我為に主ともいふべき方なり。そのいはれは一席にかたるべからず。その由縁はいてふの
前どの。先年大和の国岩倉谷にてあん首打おとさんとしつるを某忍
姿に打扮てかしこにいたり。我家につたはる火術の具を以て太刀取をお
殺しぬ。かく云を奪取今巳に金剛山のかくれ家に母ありとも恙なく
おはすとあり。桂之助どのも同居し玉ふ。佐々良三八郎が忠義によりて月
若どのも恙なく。御夫婦御親子再会の時を得玉ひぬ。くはしくは
事は猿二郎よくしりたれば。后にあらく聞いへし。されば一分の心を安じ
只此うへは復讐の事のみに心を尽さるべし。某勝基公にさゝえ

あげて。伴左衛門たとへ万里の外ゑ走るとも尋ねて出立合の仇をおんのがしあるべからずゑ。それ三郎左衛門どの洪恩をかぶりて和殿ゑむくゆる為なりとのべ。山三郎大ゑ安堵のゑひと存てゑぐ変ゆぎうり。時ゑ猿二郎あのぐ嘉門が前ゑちひ出そ中しけれ。さきわど途中ゑそうけたるのるべ。兄麻呂人質とあるべて。五條坂ゑ捕出をるは。気づいたくゆ。ゑるべくゑとうかぐべ。嘉門その儀いとをも気づゑ。ゑるべくゑとて。懐中硯を取出て一通の證書をかき。花押ををるて猿二郎ゑあたへ。汝此一通をかの地の郡司の宅ゑ持ゆけ。ゑる昔い復讐ゑまぎれとあるべことあるべんこのゑそ。猿二郎出いでたちゑ出こいそぎ。嘉門まさ山三郎ゑむかひ。某ゑるべ一個の證人を捕て。佐々木の舘の騒動

の根本い執權不破道夫が逆心より出て。継母蛛手の方ふ悪意を萬
て実子花形丸を家督とし。のちくい母子らもふしあひて。おのれ家を
うばひとり。濱名入道ふ味方せんたくなる支おそ〳〵けし。不日ふ某勝基公
の名代としてかの館ふ立越。道夫を糺明して悪意をあらはし。ふたゝび桂
之助どのを立ふ出〳〵やさびやとろふあるうと心底のそどかくとろれば。
山三郎 三拜〳〵てぞ去びける。嘉門已ふ立あがって。忍の他行あれば引
とゝびし。やうやうて申くまゝ四ビといひつ。門口ふ出て去りぬれば。
ちうあるさふひろへら供まうて。忍乗物をかゝれ来る。山三郎門おろ
して礼をおこなへば。嘉門会釈して乗物ふ乗うて。別を告て出ぬる。
やくて山三郎い喜門が教誨ふよりてゆうく心ひ〳〵け。菖蒲城が首をとって。
手水盤の水をとゝとって。血〳〵をあらひ。あく首を仏壇ふさゝゑて。

毎日をたゝき水仏手向。鉦打ちあゞして。南无幽霊頓證仏果菩提
南无阿弥陀仏あらゞ仏と唱て居うてはるふ。ふひ引けざる床の下
より。明晃てたる剣のさゝ。さゝ危く膝胴を擦てぞ問さいでゐ。
山三郎化とゝて。手ぞや手向の水をとりて剣ふそゝぐ。力をとり
永をそゝぐてゝうひ居うふ。床の下ふい仕を返たゝとゝ
けん。板敷をめるくとおし〳〵ぶりて躍出たゝい何人ぞや。是則別
人ふあらゞと。不破伴左衛門重勝あゝて。伴左衛門声たゝ。やくん
とゝひ〳〵ゐ。今朝いそゞ間さを幸ひ。汝がおと成法け来りて
床の下ふかくと。始終のことゝ成くい〳〵閉ね。草履打の宿眼といひ
妹のゝたゝかり打ちそ視念せゝといひつ。斬つゝ月ゝ山三郎
刀を抜て丁とうけとめおのれと来りて灯火ふ飛入夏の虫ゝれ

天のたすけもなりとよばゝりて十余合戦けるが。伴左衛門運命尽たる時にやありけん簀の子に足をふみはづさせて。よろめく所を山三郎すかさず足を飛せて合破と蹴たふし。乗かゝりて刀をとりなほし。首を刎てかき斬たるいきほひよくぞ見えたりける。かゝる折しも猿二郎郭の事をきゝて恙なく本懐をとげたまひて立出りつゝ体を見て主人とゝもに天を拝し地を拝して悦びのあまりに泣けるが。げにためしまれなりけるなり

（二十）積善の余慶

扨も大和国佐々木の館には。家督さだめの事につき。官領由理之助勝基公の名代として。梅津嘉門景春今日着駕のよしきこえたちて沙汰ありしかば。判官貞国くだり下知して広坐敷を掃除させ礼服を着して相待けるに。ほどなく来駕ときこえしかば。ひろく玄関に出て相むかふ。梅津嘉門。金紋紗の道服に。白精好の長袴を曳。海老鞘巻をおび。中啓の扇を把。威儀堂々として入来る。安内にまかせて広坐敷にうちとほり。設の席に居ければ。判官恭しく礼をおこなひ。長路の所御苦労のいたりにこそと相のぶれば。梅津景春一回の挨拶おはり。此度官領の名代として某まかりこしたるは別儀にあらず。先だちて次男月若丸家督の願を出されしかど。其儀にはいまだ疑のかどあつて。某にたゞしたひ糺明せよとの厳命あつて。先内室蜘手の方花形丸執権不破道友をこれへよび出されよとのことぞ。貞国かしこまりてそがくとのひはこばせければ。ほどなく蜘手の方礼服をつけ。花形丸もあさがみしもにて出来り。そのかたはらに下りて礼をなすと。不破道友も礼服にて縁がはに平伏

をれば。海津景春まづ負国をいひけるに。先だちて子息桂之助在京の刺放伏死慙の不行跡おん館義政公のおん聞ゆ達し。官領濱名入道を以て内命あり。已ゆ勘当の者とあるしが。今ゆいてうりてふく先非悔ゆ。おん館ゆ對し奉り。一切をたてたるふより勘当をゆるし。家をゆづりておん者ハ隠居あるべしとの内命あり。桂之助勘当許免のうへハいとゝの前月若をも共ゆゆるしてよびむかへ。ゆべしと相のぶるに負国ゆゆ答もせざるゆ道大いぎりて出。おそれおそくハいかゞもいてゝの前月若ハ現在母の蛛手を呪咀しなる罪人ゆ。たとへ桂之助ハおんゆるしあるとも。かの母子両人をゆるしありてハ。御政道たちがゝいハん殊更かれら両人ゆくへあるとやどゆとゆひけるに蛛手の方いふもさあり。かゝて両人妾と花形丸を呪咀したる妻い官領職ゆいまぎ

あらしめざるをゆん負国ぞの〳〵しきゝえあげゆへとゆゝゆ笑てゆひれべ景春居だけだゆありて両人をそこなゝとゆゝ妙俗の常言ゆ盗人猛〻しとゆハ正ゆ汝等ゞ支ゆゝん道大蛛手ゆ悪意をそゝめ花形丸の代おるさんと両人さゝて月若を呪咀しそのうへ好計をゆてのてふの前月若を罪ゆおゆ負国ぞの〳〵命とゆゝて月若の首を打せんにゆいてゝの前を岩倉谷ゆ引出して首打んとせしと皆汝等ゞ仕業なるぞや。桂之助放埒の根本も汝児子伊左ゆ門ゆゆひつけてさゝめたるふうさびなりたゞし分説ありやさゆゝ。膳ふとゆ道大少しもひるまずそ送当時官領職の軍師を尊敬さゝをゆふ景春公のおん詞ともおゆえさゝぐゝぞといてふの前母子蛛手の方を呪咀したるゆい自筆の願書たるる證拠あゝし某等ゞ好計とやゆい何等の証拠ありやさゝれ

あぐらうけたるなつし度にとのひけるに蜘手の方もその尾ふつき妾が悪
意なるべいふかぬ濡衣さる夏よりとぞやさてぞ居たりける。時ふ景
春はとたちて様さまふ出。先刺ヤし法けおきさる縄つさをとり
これへ引いでせとよばゝ、けるに庭さるふ梅津が従者大勢ひらくさる
背後より。名古屋山三郎礼服を着し。修験者頼豪院を高手小
手ふくくしあげ。麻義猿二郎両人ふ縄をこぶせて庭上ふひきこへ
たる。膳ふこれ蜘手の方強悪の道大もこれをえて仰天し。あげ道こ
ぞ。ふれけ。景春のひけるへ某ありてぬの者を捕へ悪人ともの奸
計をちくのちふ糺明せしゞ。山場ふ於ていそさひび證拠ふあらを。山三郎
それたゝ〳〵と命ドければ。山三郎立より。刀の瑞をもりて頼豪院が多
しめの縄をきりあげく。そく白状仕れといへば。頼豪院面をあら

蜘手の方道大たのこふよりて月若を呪詛したるより。詐筆の願昏を
以てのそふの前母子を罪ふおとしたる本末をこゝふふ白状しけるに到官員
国たゞめてこれを閉。只あたゝそて居さりけるが。たちまち怒気天ふさゝのが
て。道大が髻つかこてねぢたふ。我多病なるを以て家支を汝ふゆゞぬ
たるふ。思慮浅くして汝等ふあざむられたるくちをしさこ。内膳ふなそ
こもあさたるゞくゞ。たとへ我をあざむくこもいうでゝ青天をあざむ
くゞくふそて。大小をとりあげ。庭上ふ蹋おとしけるに。山三郎飛ひりて
おさへつけ。高手小手ふゞくくける。蜘手の方武体をえて。積悪の罪
のがるゝがしこやふひけん。懐剣を抜ようそぶくのんどぶふつきたゝこう
ぶしあゞそ伏たりける。つふふ年来の隠悪ゆく一時ふあらはるゝ。絶是皇
天の罰討〳〵ふ所〳〵。豊おそれざるんや。時ふ花形丸蜘手の方の死骸ふ

梅津嘉門善悪邪正を糺明して忠臣孝子ハ賞を受ひ積悪の徒ハ罰を受

うらの助
いてふのまへ
月若
貞国
山三郎
いそな
乃大
うへで
三八郎乃心

梅津嘉門
花形丸
そもの方
ちう荒
うら二郎
頼豪院

そろつさぶらふてあるれん志おんんこと。露だろうもそひたぐらを親の悪
意を子の方とていさめやさぬ不孝の罪。おんなじ〻さされかしあさ〻
しれん方の果やさて。悲歎の涙ふむせびけるが母の悪意も畢竟ハ某を
世ふたらんとふかれしより夏おこしとべ某とそも同罪なり。分説ハのこれ
ことのひつ。母ゲ自害の懐剣をひろひとり。己ふ腹ふつきたてんとなを。
梅津景春おしとめ。和殿ハかねて実義ある夏河おしびぬあらく若者ふ
武士道をきてさそろハおしむべき夏なれども。悪意の母ふつみがて。縁
なれべせんさべなし。自殺をとゞまり剃髪染衣ふ姿をかへ。母の菩提を
とむらいたてよ。某先祖梅津豊前左衛門清景より傳来の大憧国師の
法語一巻あり。某今ハ官領ふたくて軍務ふ暇る方なもべ。禅法を修
らべたいとぬ。の法語を和殿ふ附与もべけもべ。今より禅学をなゞ、

教外別傳の妙をきいの。直指人心の奥をさゞめて。のちくい名僧知識と名
をあげて。今の汚名をさてゞとよとのひけもべ。花形丸感佩しやり自殺
をとゞまりて。髪弗とおしきりぬ花形丸剃髪して法名を胸月とのひ。
のちく一休禅師の弟子とありて。つのふ大悟有徳の知識となり

西てゝと月のひろしをその侘ふ因果がつひのむゝうちなり

とのふ歌を詠じて。亞ふ因果禅師と称せゝとけうこうや。さて景春蜘手
の方の屍をとりのけさせ負国ふのひけるハ道友ゞ悪意の源ハ濱名入
道ふこびつゝひ。入道の權威を以てちん方を押籠一且花形丸の亞とな。
つのふい父子らもふしなひて。おのゝ家をうゞひ。濱名入道ふ一味ものき
結構ある夏あゝけ。今已ふ勝基公と濱名と確執ふあゝび。亞の中
ワけめの時節なれべ。濱名ふくしたる道友ワさ〻のたゝひふ志ゞ〻官領

の館ふひしてて。今出川相公の命をうけて誅戮をくわふるなり。ふ山三郎先刺某冠伴して。東の殿ふひしくさをおきつる。桂之助夫婦を是へいざなひ来るなり〳〵といふあど。山三郎かしこまりてひとて。行廊のかくふのれ。いざこなたへとよび〳〵れば。かひて用意やあるとけん。佐〻木桂之助国知。折烏帽子ふ大紋の直垂を着し。右鞘巻をおびていで来る。づいていそふの前。纐纈の小袖ふ摺箔の袿衣をかけ。ゆの木のかをりて馥郁として蓮歩をうつを。次ふ月若丈時ふ十三歳。髪を生立て総角ふむすび。小素襖ふ烏帽子かけて相ゆさびて。佐〻良三八郎。剃髪の姿とあらて。僧衣を着し。妻磯菜娘根を具してのて来て。かの百鱗の巻物をうやうやしくさげて貞国ふ呈し。おのく座をさだめければ。梅津嘉門景春威儀をはくろひふ国知ね。今志をあらためられなふ

より。家相続の儀を命ぜらるるとて。御教書をたまはりてねんごろけとりゆへとて相渡せば。桂之助おゝ頂き。館のおん義悲官領の御仁心並ふありがたくゆとひておさまれば。判官貞国をはじめとして皆一同ふ感限ともし。さて桂之助父ふむすひ。佐〻良三八郎夫婦の忠義。兄弟の児等ゆ孝心をものがたりければ。名古屋山三郎ハ不破伴左衛門等五人の者を打て父の仇をむくいたる始末。あらびふ麻呂猿二郎ゆ忠義の子細をかたりけるぞ。貞国打聞て転感嘆ふ堪ざるなり。時ふ梅津景春いひけるハ。悪人亡忠臣孝子ゆ〻しるれば。当家益繁昌し子孫長久ならがひな。時刻うつれば其いとやまかりてかるべといひて立あがりて。従者ふ命じて道具をあらひ頼豪院を。檻車ふ乗てかさいざさしむれば。貞国国知をはじめとして皆一同ふ景春をおくり出て。茶〻く礼をおとなふ景春はひふりれを告て

五條坂神林のあるじ
名古屋山三郎が姿を
祝してあるべし

山三郎

の舞妓を
おくる
山三郎
銀子
衣服を
つくして
神林夫婦
をもてなび
舞人皆
ふあくよ

八重垣

此一圖

神林夫婦

撰擬英
一蝶所
畫名古
屋山三
絵巻物
之圖

乗物ふすのり。行列らんせてゆうてけり。さるあどふ官領の館ふおいて。再又道友を糺明あり。一味の輩を尽く捕へて頼豪院と共ふ誅戮ゆひ道大い殊ふ大罪の者なればおのり刑をくりへあり。さて名古屋山三郎。并ふ佐く良三八郎夫婦。娘。麻彩猿二郎等までめされてその忠義孝行貞節を御賞美あり。それ〳〵ふそくぐの賞金をたまわりけるが。皆く感涙をおとしてゆうぬさて判官貞国薙髪して桂之助ふ家をゆずり。平郡の別館ふうつり住名古屋山三郎を執権とし父三郎左衛門が禄ふ道友が禄をくわへて与へけるが。昔ふ十倍して富る身と成。麻彩猿二郎ふ禄をつちとしめて忠義を賞じけるが両人面目を施して其ひぬ扨又浮世又平ハ百蟹の巻物を一覧して画道の奥妙をきわめ。師匠戸佐正見の勘気をゆるさるゝ。戸佐又平重起と名告。梅津吉茄門の吹挙ふよりて義政公の絵所となり。妹放竜ハ曾て兄ふ学びて自然と画道の妙をきわめたれば。世ふおゆて絵と称じてその名高くきこえぬ。佐く良三八郎ハ抜群の忠臣なれば。桂之助おゆく禄ふあくんとおゆくれけるが。今ハ桑門の身なれば。とて禄をうけざれば。唯数百金をあくへけるふ。身ふ応ぜざるなるのゆうて再三辞〳〵けれども。ちひて受けるが。その金を以て長谷部雲六が妹八重垣をあゆきもひ生〳〵て家ふ養おきぬ。たれハその誠心を感ての支とぞ。さて山三郎ハ葛城が志ふ応ずあり。神林がりふ金あるさく追福ふ成ひとなりませ一生妻をめとらずとちうひけるよしを。三八郎おゆ同て。のち孝ふ不孝の才一なりとさくめ。ぞの八重垣をおゆうて妻とあるしむ。やどなく男子をまく〳〵け。後ふ名を名古屋小山三と稱ぞ。

あとさんざいろも
小山三出雲の神子阿国といふ舞姫ゆえとして。歌舞妓躍
きょうげん
狂言といふ支ゆ始なるゆえよし。後編ふ詳なるし。発兄の時ゆ
まちえ
待得てそうろうなり。不破名護屋の文字ふ。自然「不破」名護屋とゆ
くん
訓あるも。此稗史ふおいてそのみじゆ吉兆なるべしや

昔話稲妻表紙巻之五下冊終　大尾

江戸　醒醒齋山東京傳著
一陽齋歌川豊國繪
書賈　本所松坂町平林庄五郎藏梓

順補九

黄疸のうあらまほしきまもの

小半刑八百二十四錢

○第一顔のいろ黄ばみむくをゆ足表ひまゆ麻ふよう
○息ぎまーくあるみぐこ胃そこたぐきあるみよ
○ものごと氣ぶまあうふく寝るまゆ成このむよ
○肩背まちゆ背まちゆ足だるきよ
○惣身血のめぐりあくゆ爪ちくれうもくそるよう
○はらそう胃つくえむゆ痛ふ腹ふかまりあるよう
○積さーまみ氣ちーくむ絲やけあらびゆること
○月水遠んゆこ或ハ五ヶ月又ハ三年も絶水ふ来ざよ
○常に大便ゆけつーじ腹う目まゆ立ぐらみするぐう
○さんごくーくしざちゆね労症のぐとぐうく頓ふふよう
○男女小児ふ必ずゆ病ひともうらぐ何ぐとなく氣
おもあうゆく何病ひともうらぐ
此ゆ中ゆ成丹ゆ金使するくうこと必し

○尤病人を患するの先此能書をよく〳〵たちうけ
ゆくべきなり然に某中間にあつて金快を以て
三年五年と極くの長うの命をつゝ小人の某奏上
捨て奉るまことの心盛なるべし或いけるの者
薬用ひざる病いやましいよく〳〵深入り金快すべ
方い能くさい能まるべく本能書小冊
○右の病根心氣ばかり脾胃の労損より起る
治一ゆくの治療ひとくれ世の医一有ありの二剤程用ひ速に治
用ゆるべき奇功あり利ひく後三日のうち大便ろく通じ其某相応の
効ひ全快まことにうべき也順補九ハ第一ひみをよく調和まるべき
をもつてげ血の発ぐりをとゝ下部まるべき陽気順ならしまるべき妙剤あり

本家　両國横山町二丁目　大阪屋半藏

京都賣弘所　蜻蛉師通東洞院東入町大和屋彦右衛門

御房内いまうまるまあまこ仮仮西まる町くく津く浦くまるく反次而
召本家　各あるよくく陣屋陣屋陣屋くく上山家　歳の不いい

近世説美少年録　初編二編出板　曲亭主人著
三編卯春発板　哥川國貞画

松浦佐用媛石魂録　全部十巻　同　一筆庵主人画著

美濃舊衣八丈奇談　全部七巻　同　蘭齋北嵩画著

綟手摺昔木偶　全部五巻　柳亭主人著　柳川重信画

尼子九牛七國士傳　近刻出来　為永春水著　英泉國芳両画

文政十三庚寅年仲夏発兒

書房　大阪心齋橋筋博労町　河内屋長兵衛
同所　河内屋茂兵衛
江戸小傳馬町三丁目　文溪堂丁子屋平兵衛